



歴史的市街地におけるコモンズ創出のための既存住宅の改修計画

森田研究室 821350045 森川隼

■ 背景と目的

● コモンズ再建の必要性

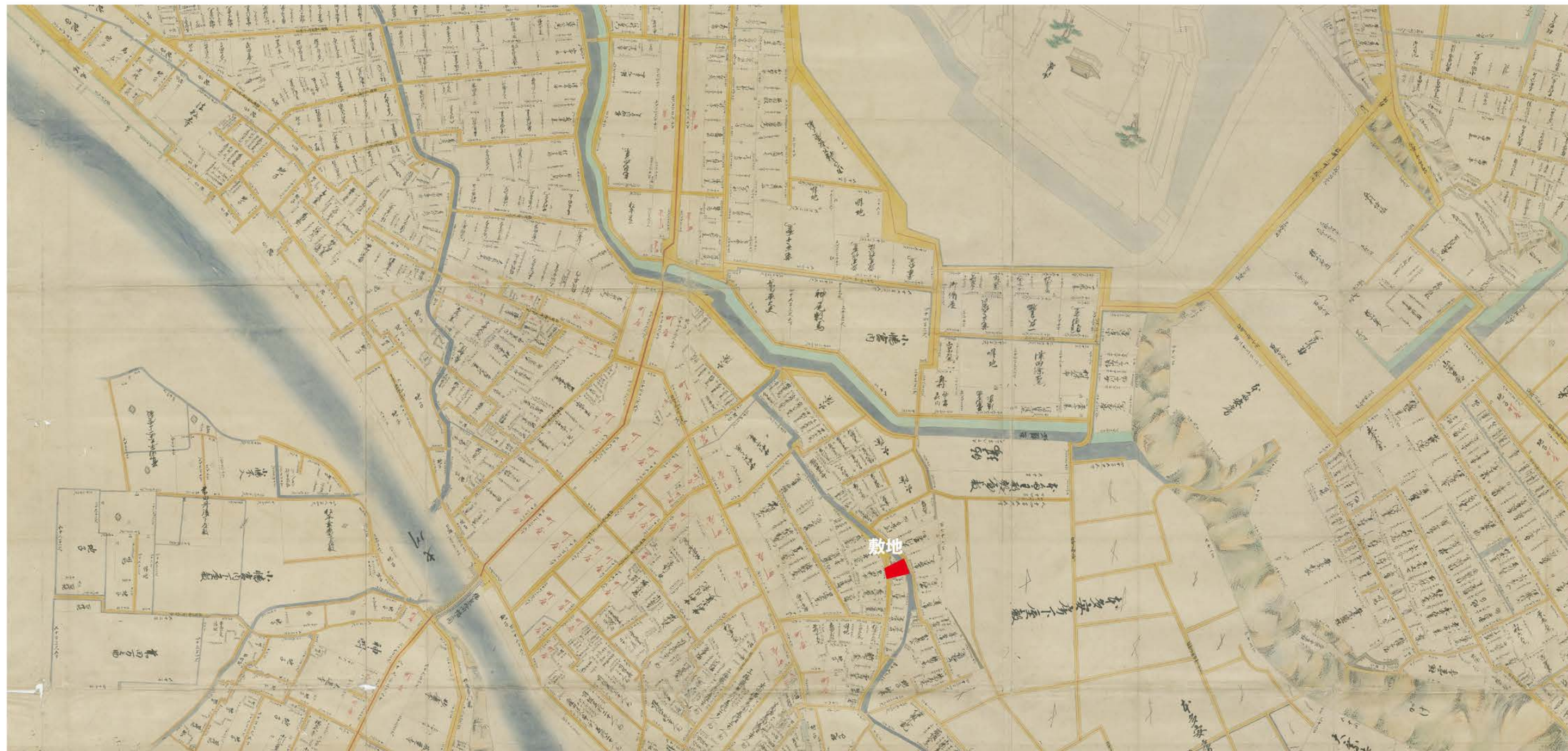
哲学者の斎藤幸平は、マルクスの『資本論』における「本源的蓄積」論を基に、資本主義がコモンズを解体してきたと指摘し、持続可能な社会の実現には〈コモン〉（社会的に人々が共有し、管理すべき富）、すなわちコモンズの再建が不可欠であると主張している。現代日本において、少子高齢化と人口減少が進行し、空き家の増加や地域コミュニティの希薄化、高齢者の孤立が問題となっている。これらは、私たちが経済成長を盾に共同体のシステムやコモンズを破壊し、人々を分断してきた結果である。本設計では持続可能なコモンズを既存住宅の改修を通じて創出する。

■ 住宅をコモンズへと転換させていく

コモンズは、もともと共同体が管理してきた山林などの共有地を指す言葉である。しかし、近年では「公」と「私」の中間に位置する「共」的な場を意味する用語としても使われるようになった。

斎藤幸平は〈コモン〉を「社会的に人々が共有し、管理すべき富」と定義し、共同管理の重要性を強調している。能作らは、人口減少が進む未来において個人的なスキルを資源と捉え、その資源を互いに提供しあい、協働して暮らす共同体と、それを支えるコモンズが必要になると主張している。本設計では〈コモン〉となる要素を段階的な改修を通じて取り込むことによって、「私」の領域にある住宅を「共」の領域であるコモンズへと転換させていく。

■ 敷地 自然環境から歴史・文化まで幅広い豊かな資源をもつ都市金沢



寛永七年金沢図 (1667 年)



● ギャラリー 現在 (国土地理院地図)

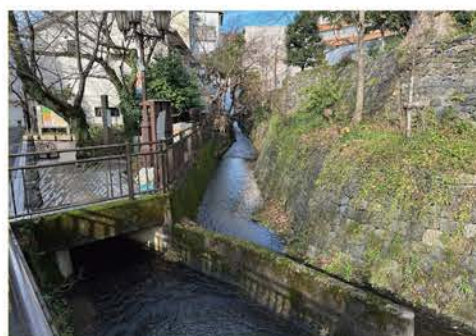
歴史

金沢は、戦国時代に加賀一向一揆の拠点として発展し、その後、天正 11 年（1583 年）に前田利家が金沢城に入城して加賀藩の城下町として整備された。江戸時代には百万石を超える石高を誇り、文化や経済が栄え、伝統工芸や美術が発展。明治以降も城下町の風情を保ちつつ、現代に至る。敷地周辺は伝統的街並み区域に指定されている。



自然・地理

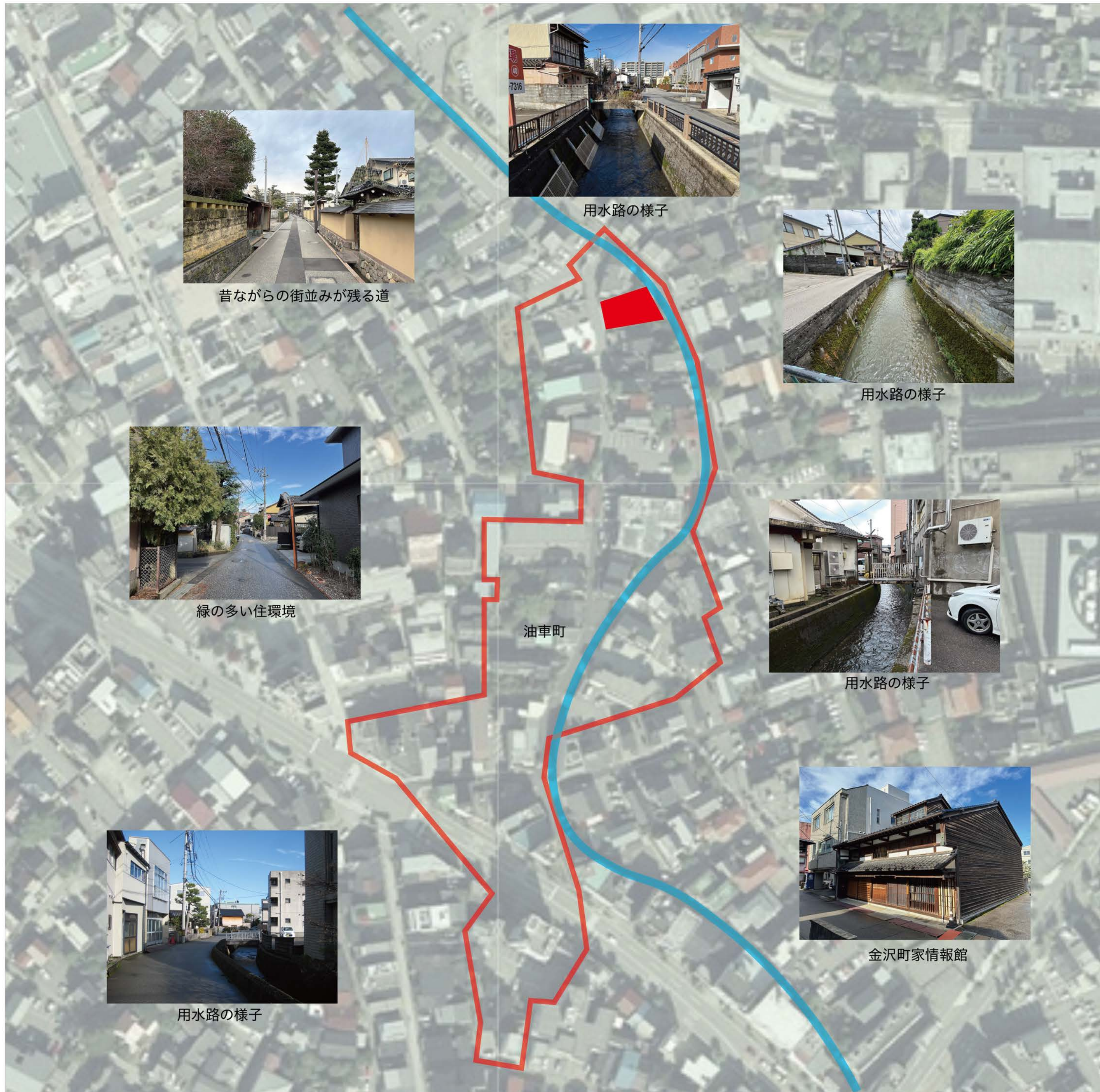
敷地は北の浅野川と南の犀川に挟まれたエリアに位置する。城下町であった名残から、防衛や水運、灌漑に欠かせない用水路網が整備されており、その数は 55、総延長は約 150km におよぶ。敷地の周辺にはかつて水車が存在し、藩政初期に菜種油の製造、明治から昭和にかけては精米、製粉などを行っており、暮らしや生産と密接に結びついていた。



文化

金沢は伝統と革新が共存するアートの街としても知られ、加賀藩主前田家による工芸振興により発展した金箔や加賀友禅、九谷焼などの伝統工芸が今も受け継がれている。現代においては、金沢 21 世紀美術館をはじめギャラリーも多く点在し、現代アートの発信の地としても注目される。また、茶の湯も発展し、その精神は現代においてコーヒー文化へと形を変えて地域に根付いていると考えられている。

コーヒーの年間購入金額日本 1 位 (2009～2011 年の平均)

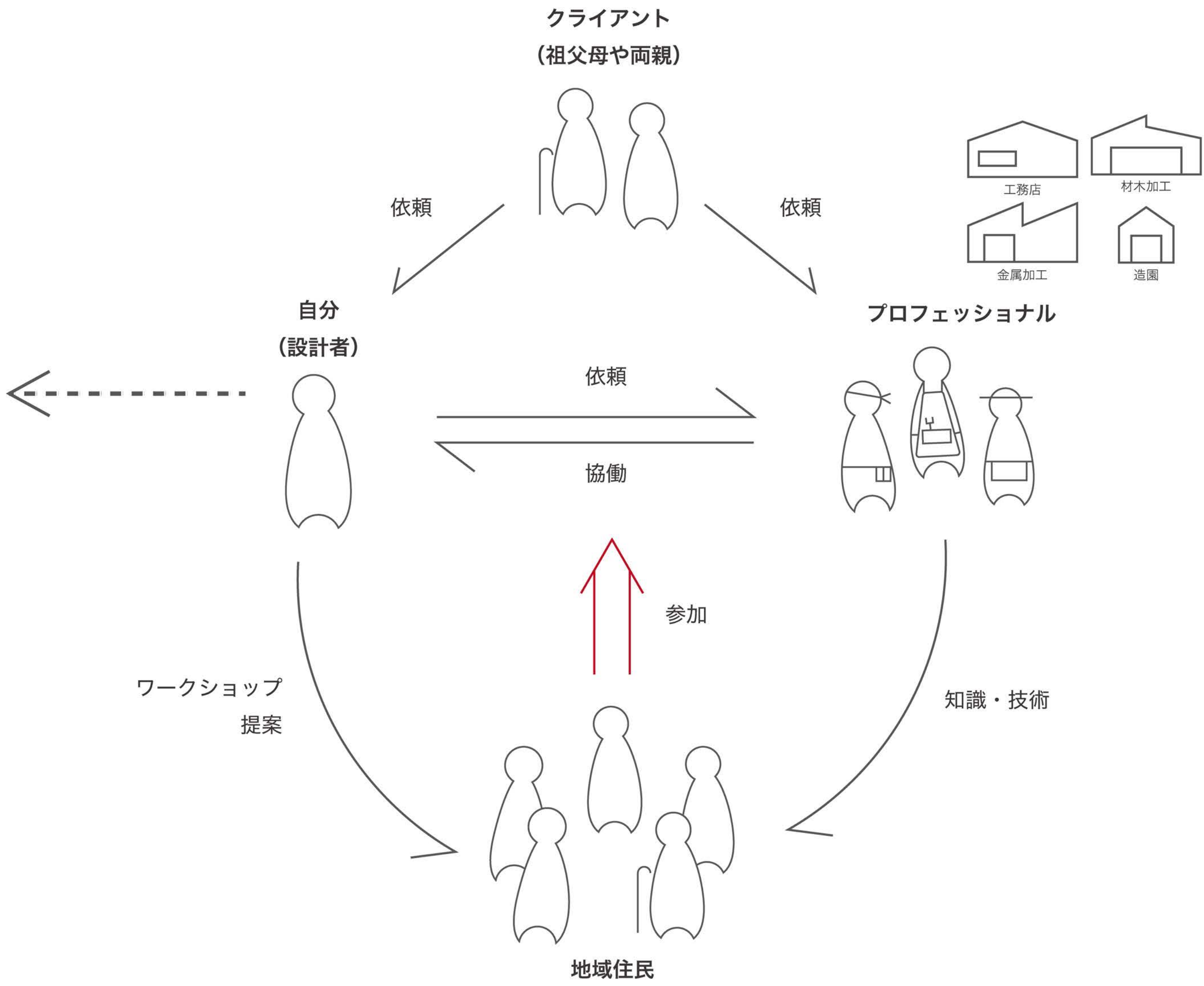
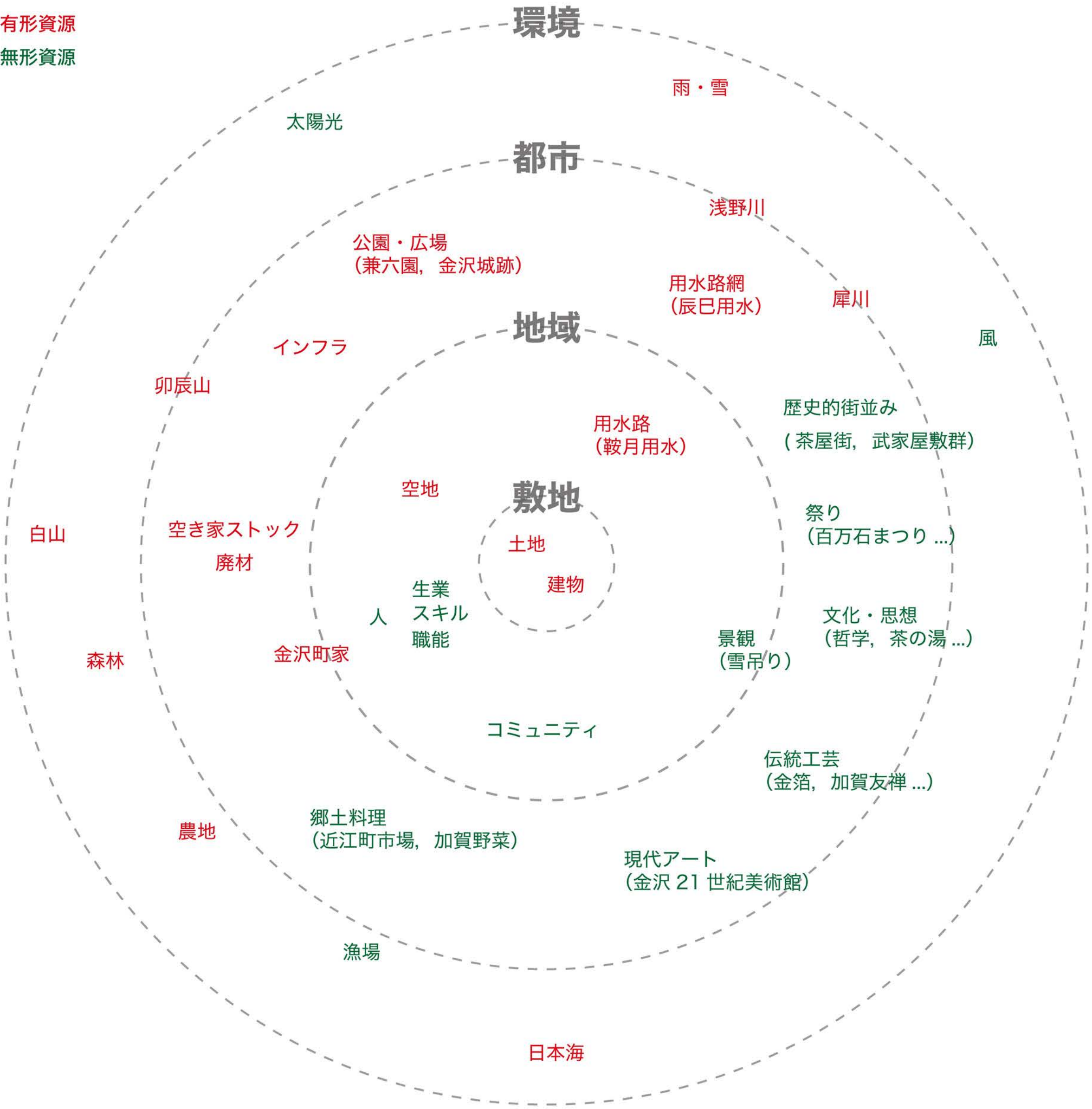


現在 (国土地理院地図)

■ 段階的な改修とその方法



資源マップ 金沢モデル



改修フェーズの決定

住宅にとって住人の死や移住による新たな住人の発生は、大きな変化であり、段階的な改修の足がかりとなる。住人のライフスパンの予測図を作成し、段階的な改修のフェーズを策定する。

地域資源に着目する

自身は設計者として金沢の資源に着目し、改修案を提案する。土地や空き家ストック、用水路などの有形資源から、景観や文化・思想などの無形資源、自然環境から人工的なものまでを幅広く資源として捉える。

プロフェッショナルや地域住民との連携

改修の際には、上図のような改修スキームを構築。プロフェッショナルと協働して解体や改修の過程をWS などを通じて地域住民に開放することで、コモンズに関わる人々を増やしていく。

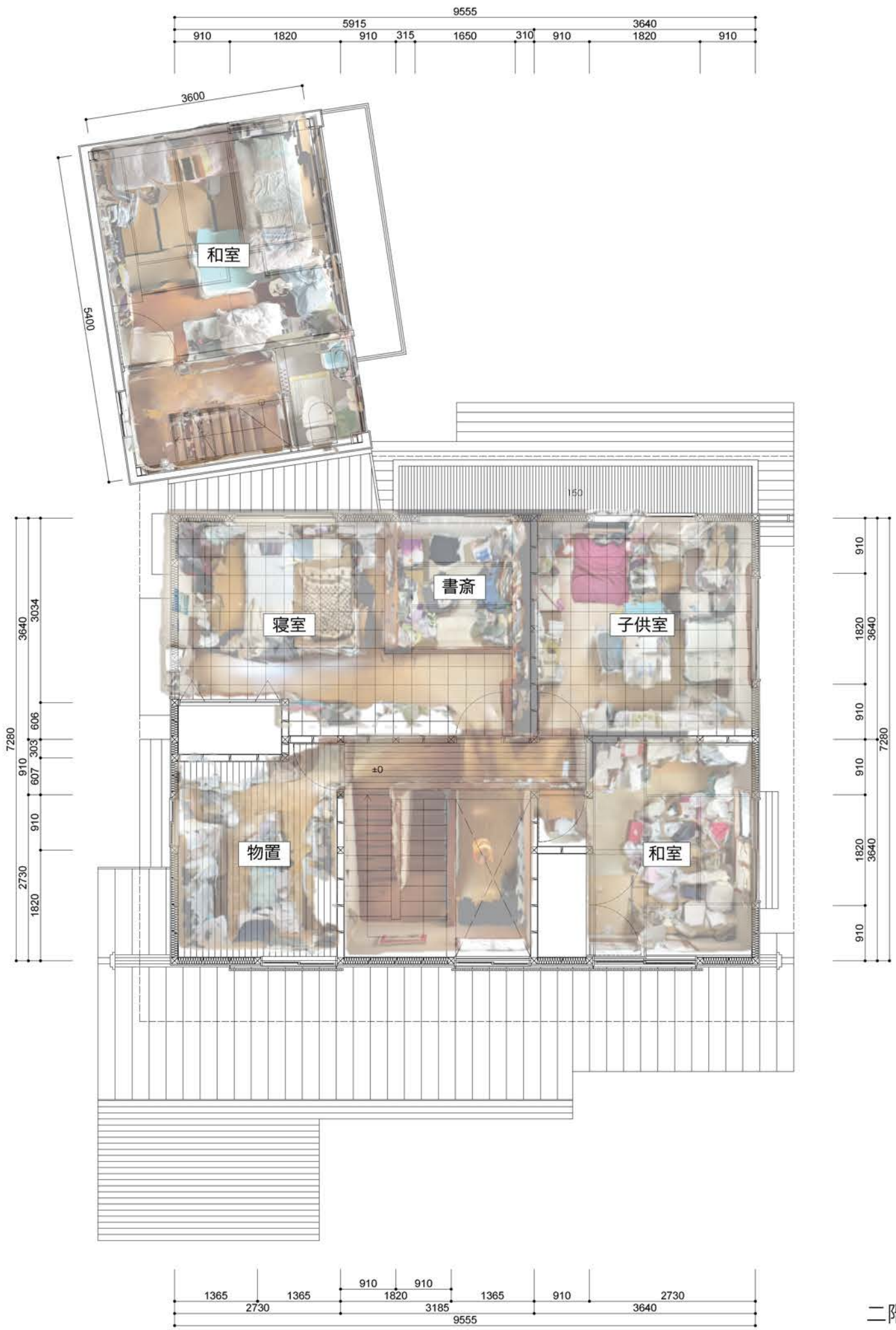
改修による空間の変容

段階的な改修を重ねていくうちに、住宅の領域はコモンズと混ざり合い、住宅としての空間が解体されるとともに、コモンズとしての領域が拡張されていく。

■ 既存建物の状況



敷地は母屋と離れの二つの建物と庭で構成されている。
かつて、曾祖父母、祖父母、母の 5 人で暮らすことが想定されていたこの住宅には、現在祖父母の 2 人が暮らしている。祖母は主に一階で生活し、祖父も一階と寝室と書斎のある部屋しか普段利用せず、使っていない部屋は物置と化していたりと、住宅をもて余している状況である。



z
S=1:80



庭



リビング



ガレージ



応接間の本棚



ダイニングとキッチン



廊下吹き抜け



母屋和室



子供室



物置



竣工当時の写真

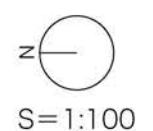
2025~2035

庭を小さな共同畑に、物置と化したいたげラージを休憩スペースとして活用する実験プロジェクトを企画する。畑のスペースを確保するため、庭の樹木を数枚西側に移植することが必要になった。コンクリートがベタリ、土層まで掘り起こす。こうした大規模な単なる改修作業ではなく、地域の人々とともに行うワークショップ（解体〜炭づり〜移植）として実施。これをきっかけに、共同畑の構想を広く伝える場ともなった。

準備が整い、共同畑の告知を行うと、ワークショップに参加してくたれた人々や、地域の家族連れが少しずつ利用するようになった。畑のやりいには、すく水を流れる用水を活用。

祖父は長年の家庭菜園の経験を活かし、畑の管理やアドバイスを担当。足腰が弱くなった祖母も、自宅にいながら訪れる共同畑のメンバーと交流できるようになった。

こうして住宅をコミュニティと転換する計画がスタートした。



2035~2050

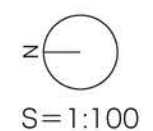
祖母が亡くなり、両親が金沢へ移住する。

それに伴い、定期的に手伝っていた共同畑の管理を両親が引き継いだ。畑で農作物を育てながら人と交流を深めるうちに、「育てた野菜を使って料理を作るみたい」という声が上がる。そこで、使われていなかった応接間を改修し、小さなシェアキッチンを作ることにした。造作の棚などは残し、みんなで床を剥がして土間空間を設けた。

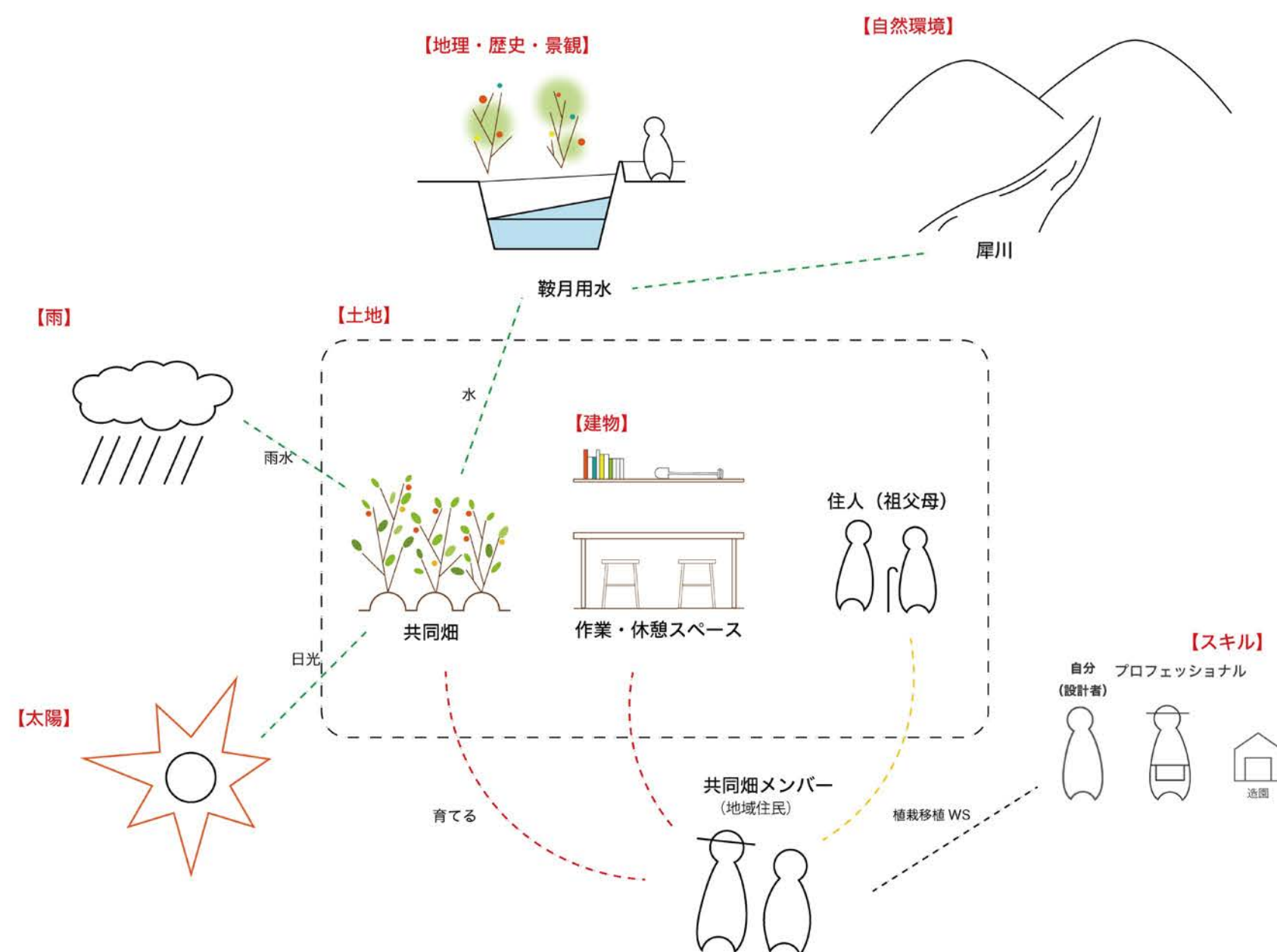
さらに、共同畑のメンバー以外にも、シェアキッチンを使ってもらおうと、SNSなどでシェアキッチンの存在を発信すると、料理好きのサラリーマンが休日シェフとして利用したり、飲食店の営業先として入る人がおとしメニューをふるまう場として活用されるようになった。

こうして、コミュニティと関わる人々の輪が広がっていった。また、シェフがいない日は、両親が定年後の新たな挑戦としてコーヒーと軽食を提供する小さなカフェとして営業している。

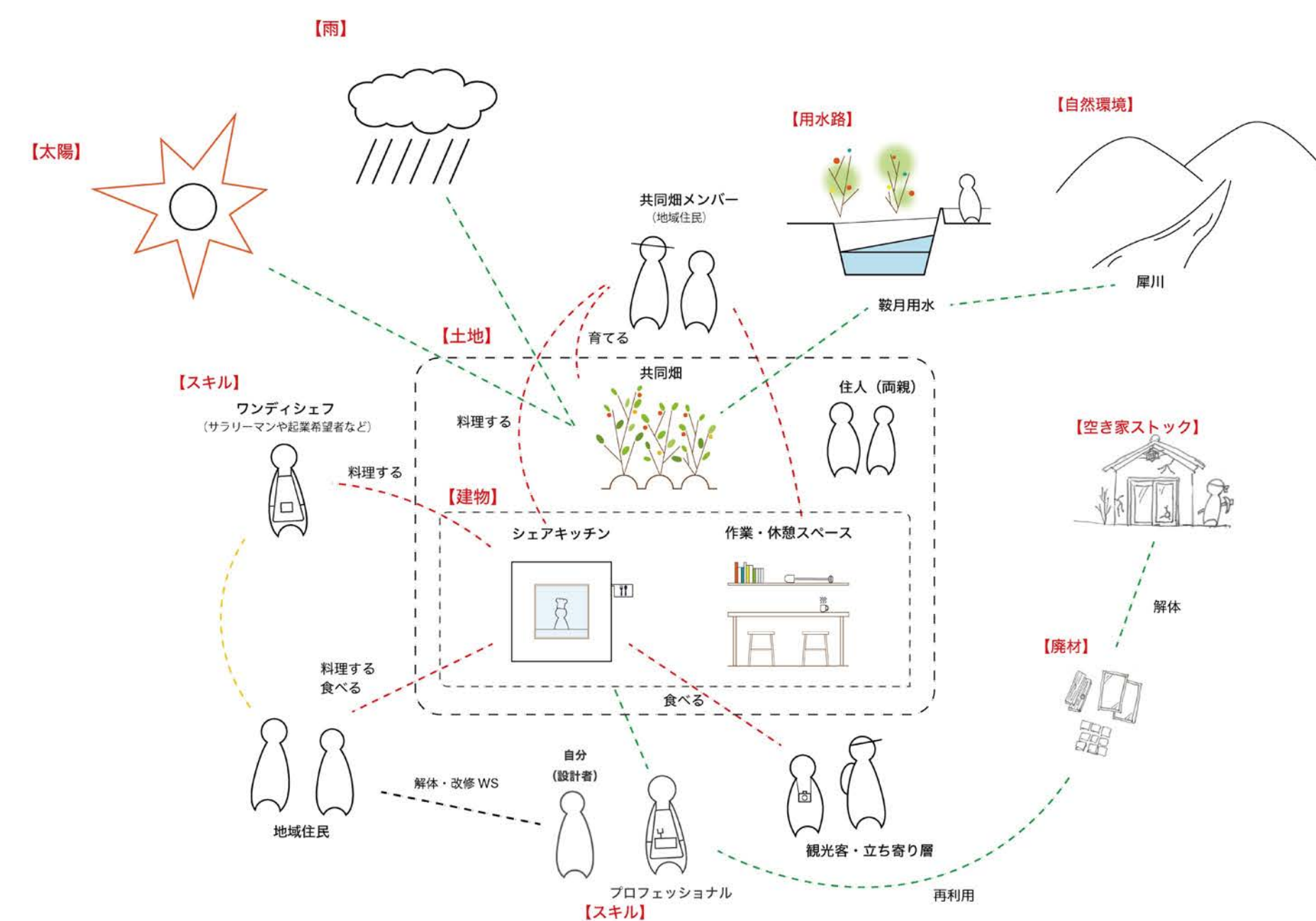
かつて来客をもてなした応接間は、地域の人々を迎え入れる新たな場へと生まれ変わった。



- ・ 共同畑
- ・ 作業場兼休憩スペース



- ・共同畑
- ・作業場兼休憩スペース
- ・シェアキッチン

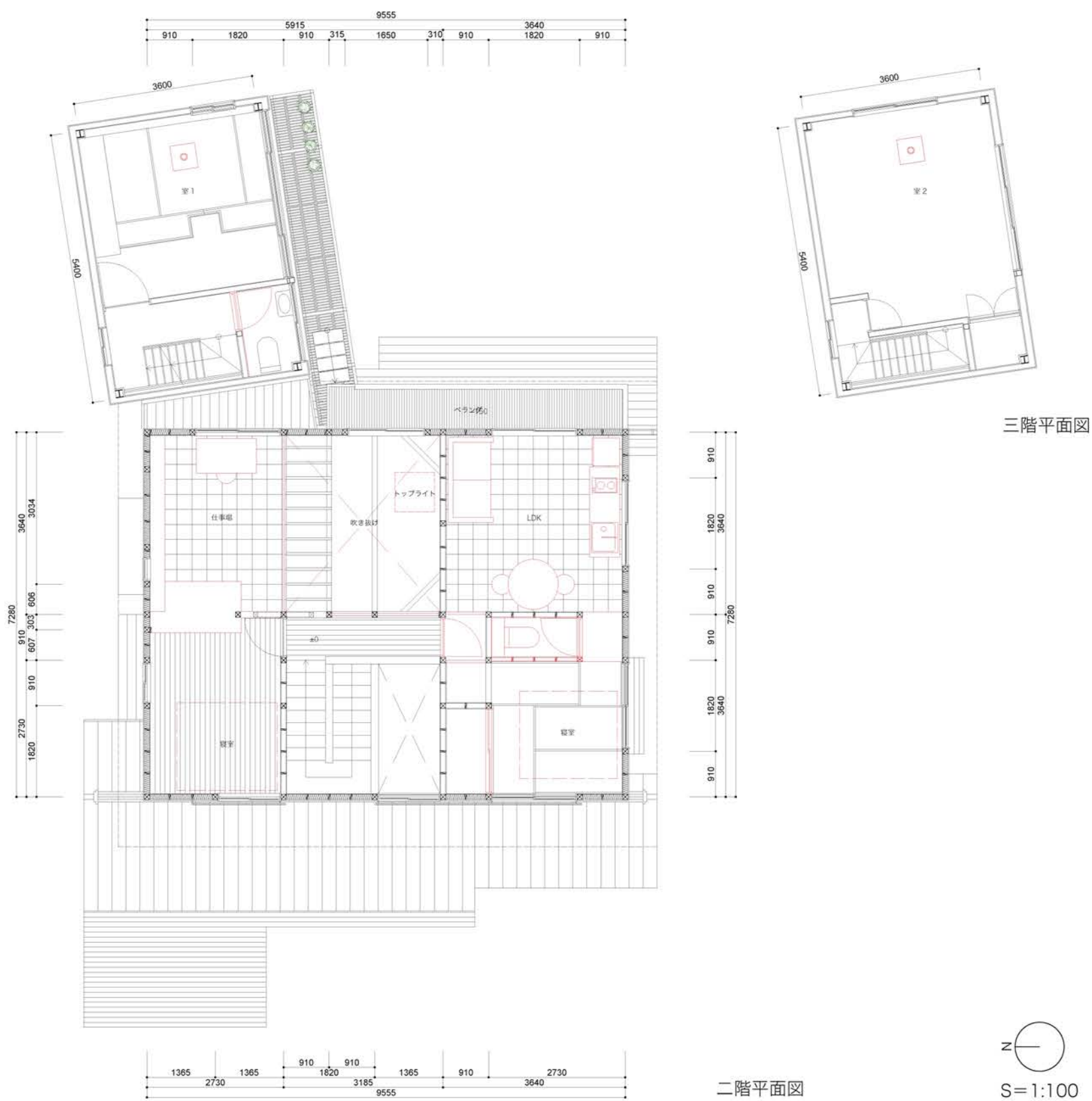
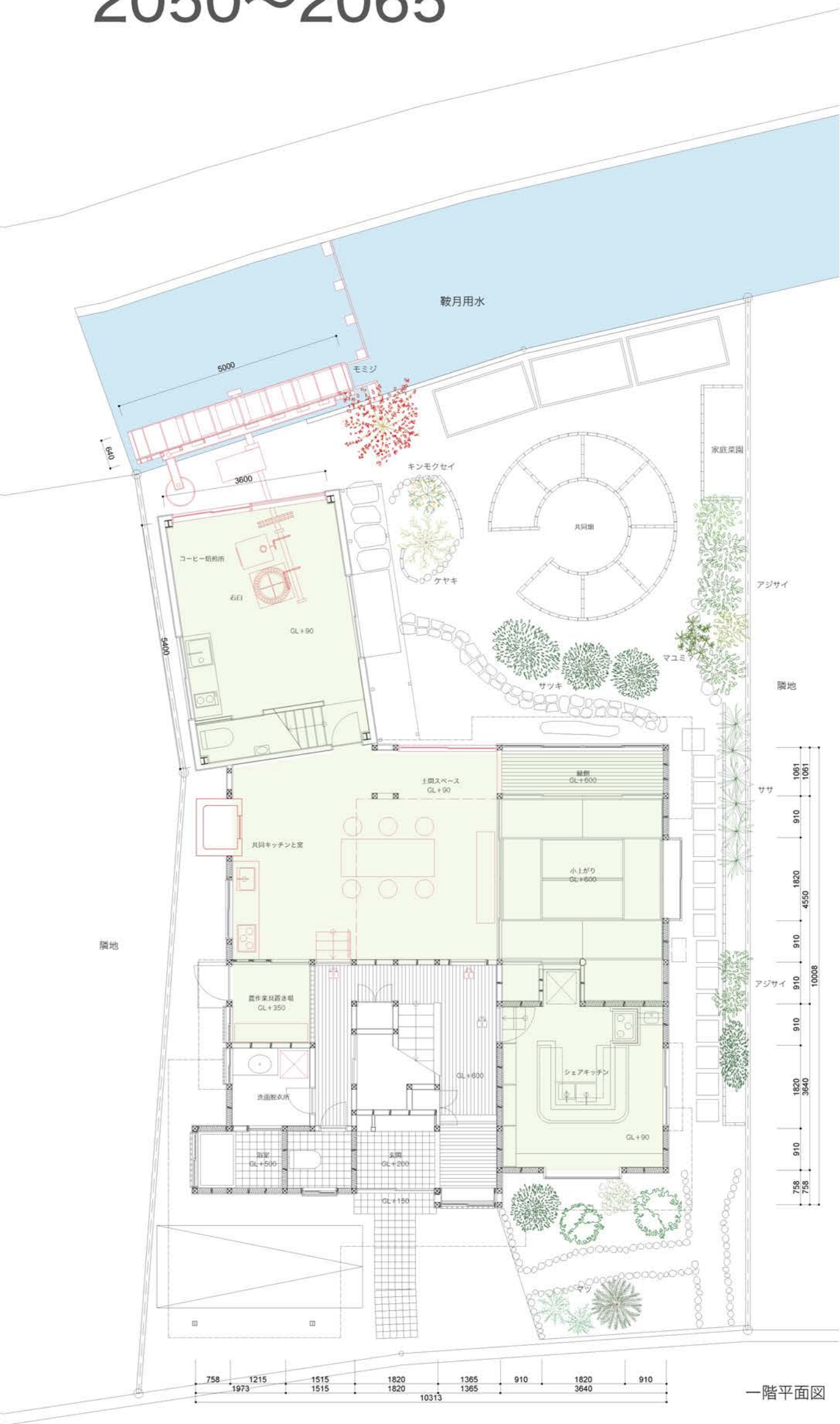


Phase3

2050～2065

水車が繋ぐ暮らしと歴史

父の死をきっかけに、自分とパートナーはこの地へ移住することになった。母と自分たち夫婦の生活空間を二階へ移し、一階の畑に面する部分をコモンズとして開放することにした。一階の庭に面したLDKは、リビングとして使われていた和室を小上がりとして残し、土間スペースと共同キッチンと窯へと改修。土間スペースと小上がりは、農作業の合間の休憩や町内会の集まり、有志によるイベントやワークショップなどの場となり、地域コミュニティのリビングとして新たな役割を担う。そしてかつて用水路沿いという地理を活かし、水車を用いて菜種油を製造していたことから油車と名付けられたこの地に、地元の職人やエンジニア、歴史家たちの協力を得て水車を復活させた。現代に蘇った水車は「発電」、「揚水」、「動力」の三つの役割を果たす。発電によってコモンズの活動を支え、揚水で地下に設けた貯水槽に水を蓄え、生活用水として活用。そして、回転する水車の力を利用して、金沢の文化として根付くコビ文化の一端を担う焙煎を行い、石臼を動かす。石臼で小麦を挽き、パンを練り、廃材を燃料にして窯で焼く。小さな生産の拠点になった。冬は窯で暖をとることができ、夏は土間に埋設したパイプに揚水した水を流して冷をとることができる。

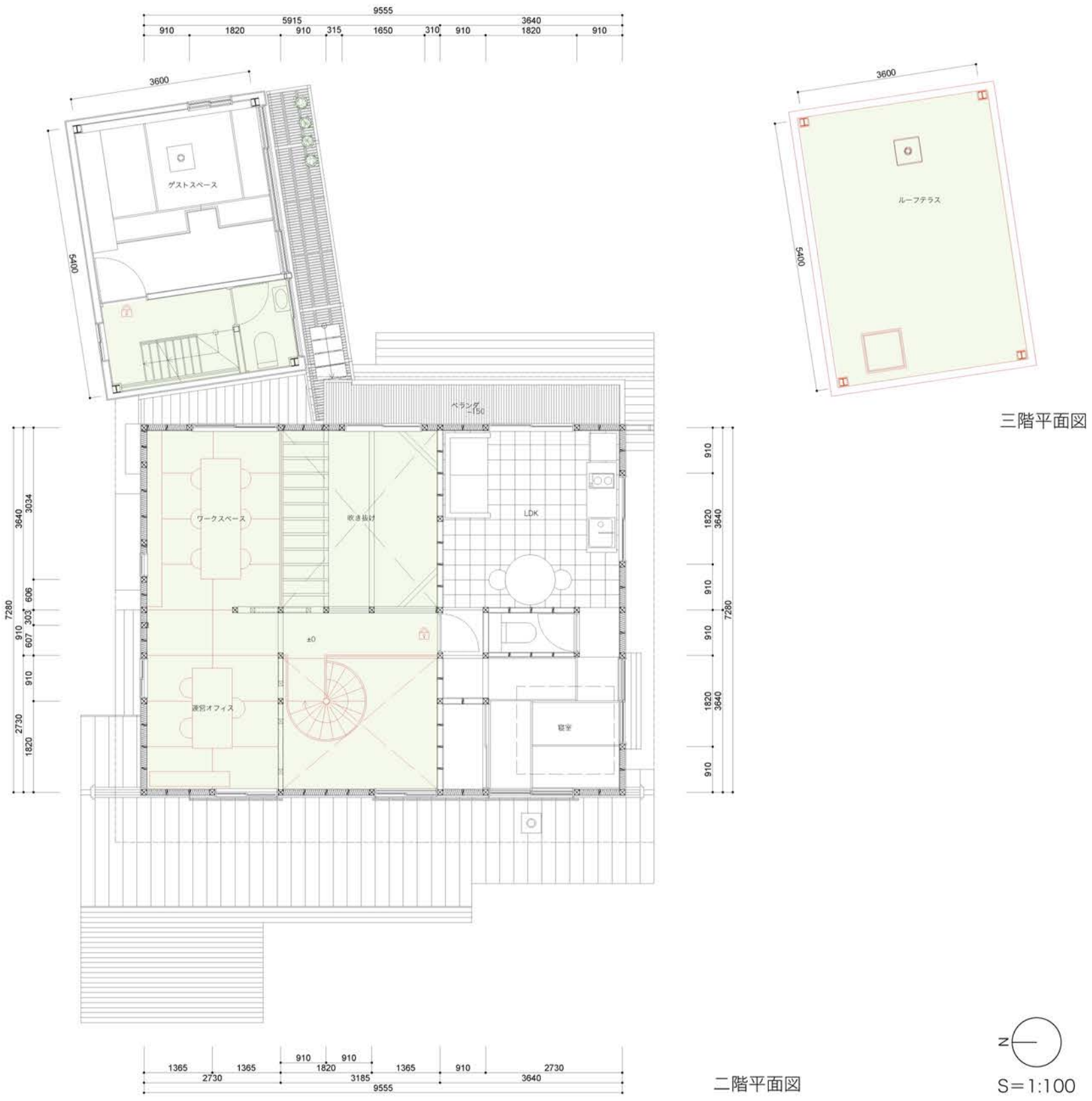
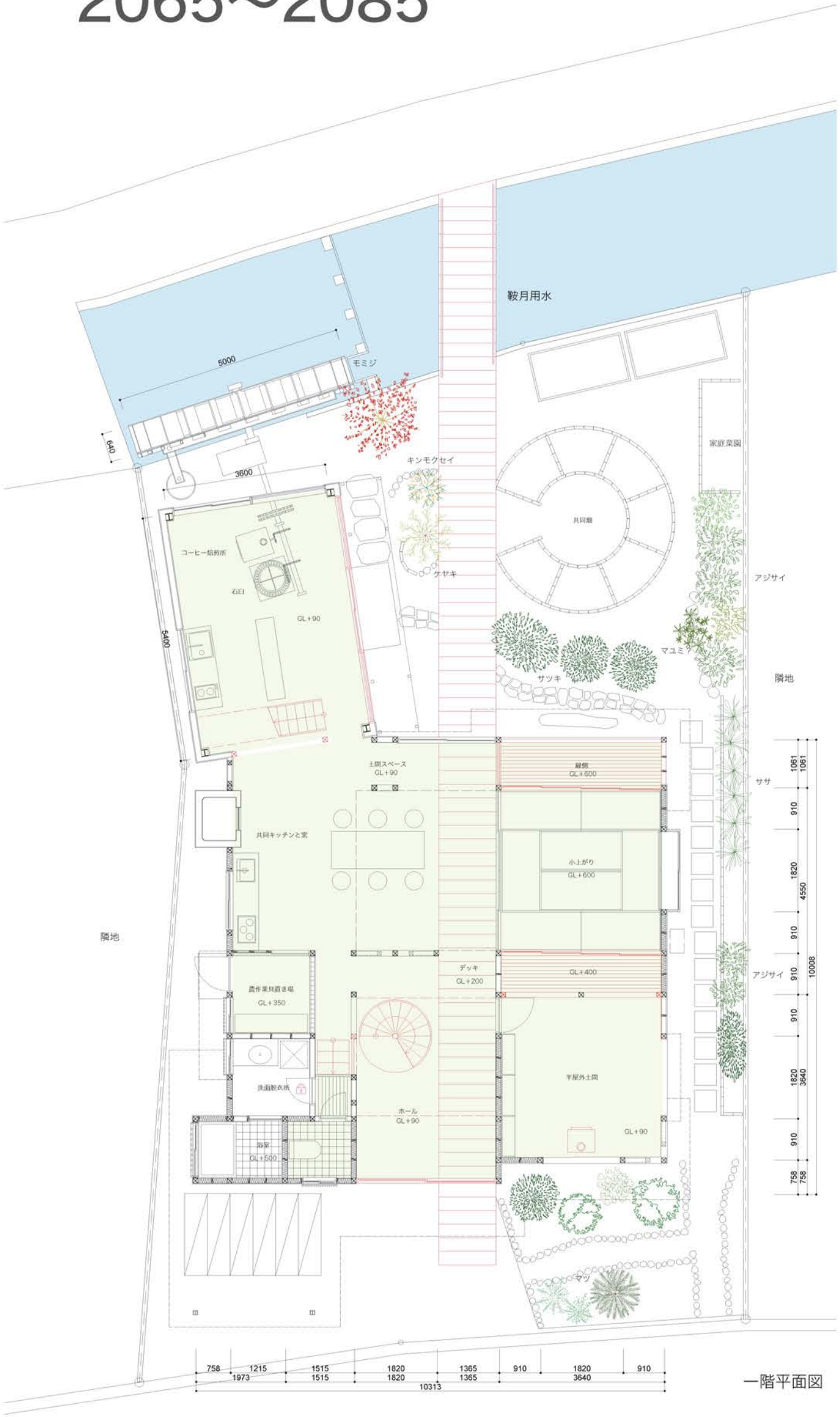


Phase4

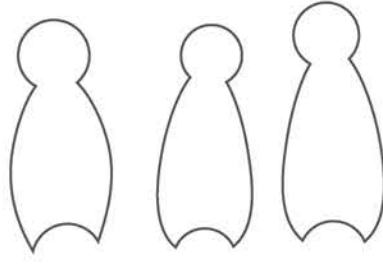
2065～2085

人を引き込む軸線

母が亡くなり、自分とパートナーの二人暮らしとなった。自分たちがいなくなった後も、この空間を未来へと残したい。そう考え、コモンズの理念に共感してくれた有志とともに運営団体を設立することにした。運営団体は、地域コミュニティの活性化を目的にイベントやワークショップを企画し、コモンズの維持運営を、住民のまとめ役として地域住民と協力しながら行う。二階北側のスペースは、若年層からの要望を受けてワーク & スタディスペースへと改修。ハイスайдライトを設置した。離れ三階を減築し、テラスをすることで、光が入りやすくなった。シェアキッチンの機能は共同キッチンと統合し、空いたスペースを半屋外の土間空間へと改修。小上がりと一体化し、廃材を用いて小物や家具を制作するWSスペースとして用いたりすることができる。道路からの視線が抜けることで、中の様子が分かりやすくなり、より開かれた場となった。また、フェーズ3で撤去した橋を再び設置。建物を貫き、全面道路まで続く軸線として機能させることで、人々をコモンズへと導く。デッキの木材には空き家の解体材を転用した。

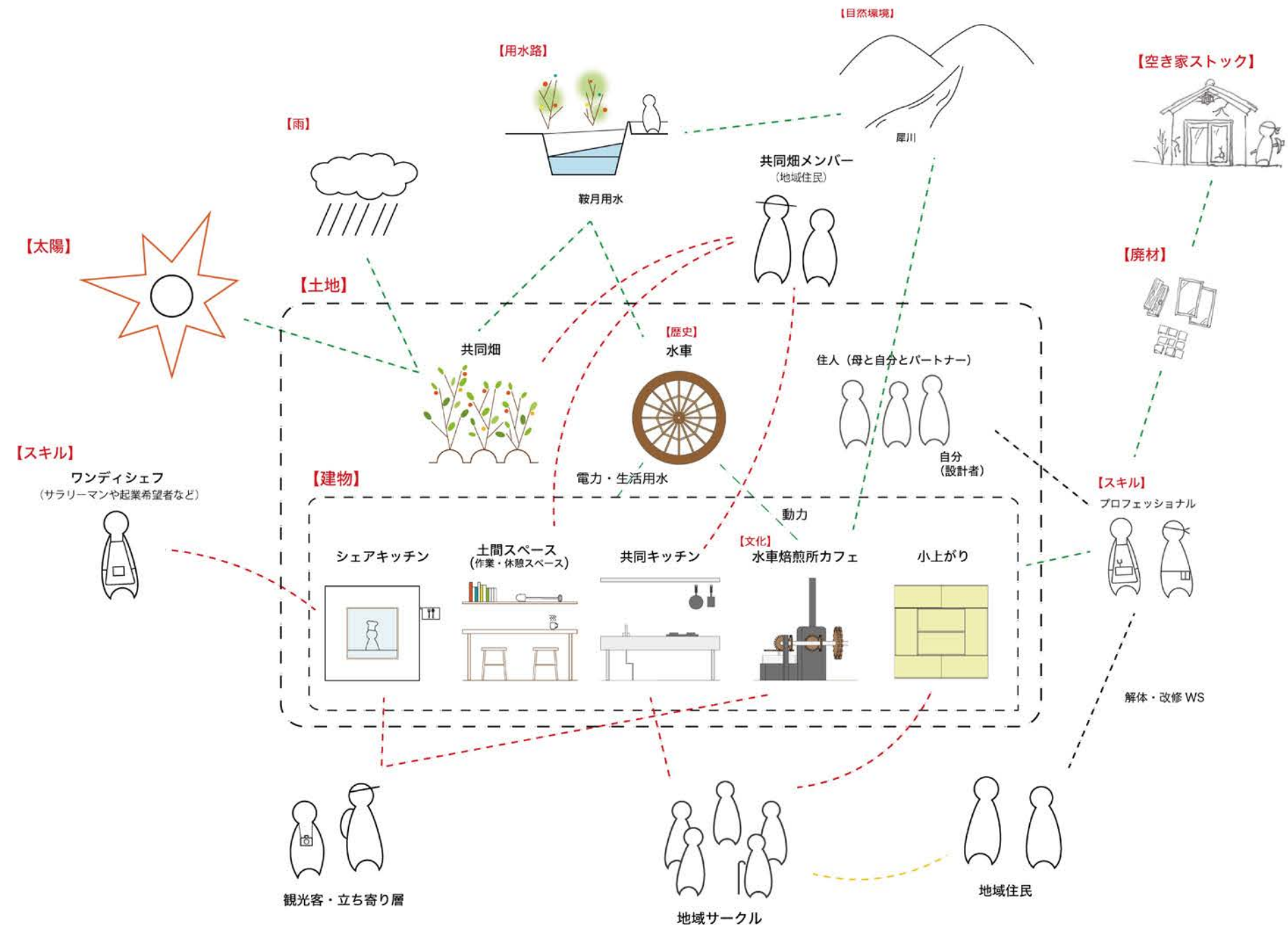


住人（母と自分とパートナー）

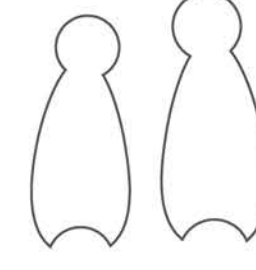


コモンズの空間

- ・共同畑
- ・土間スペース（作業場兼休憩スペース）
- ・シェアキッチン
- ・共同キッチンと窯
- ・土間スペース
- ・小上がり
- ・水車
- ・コーヒー焙煎所
- ・石臼

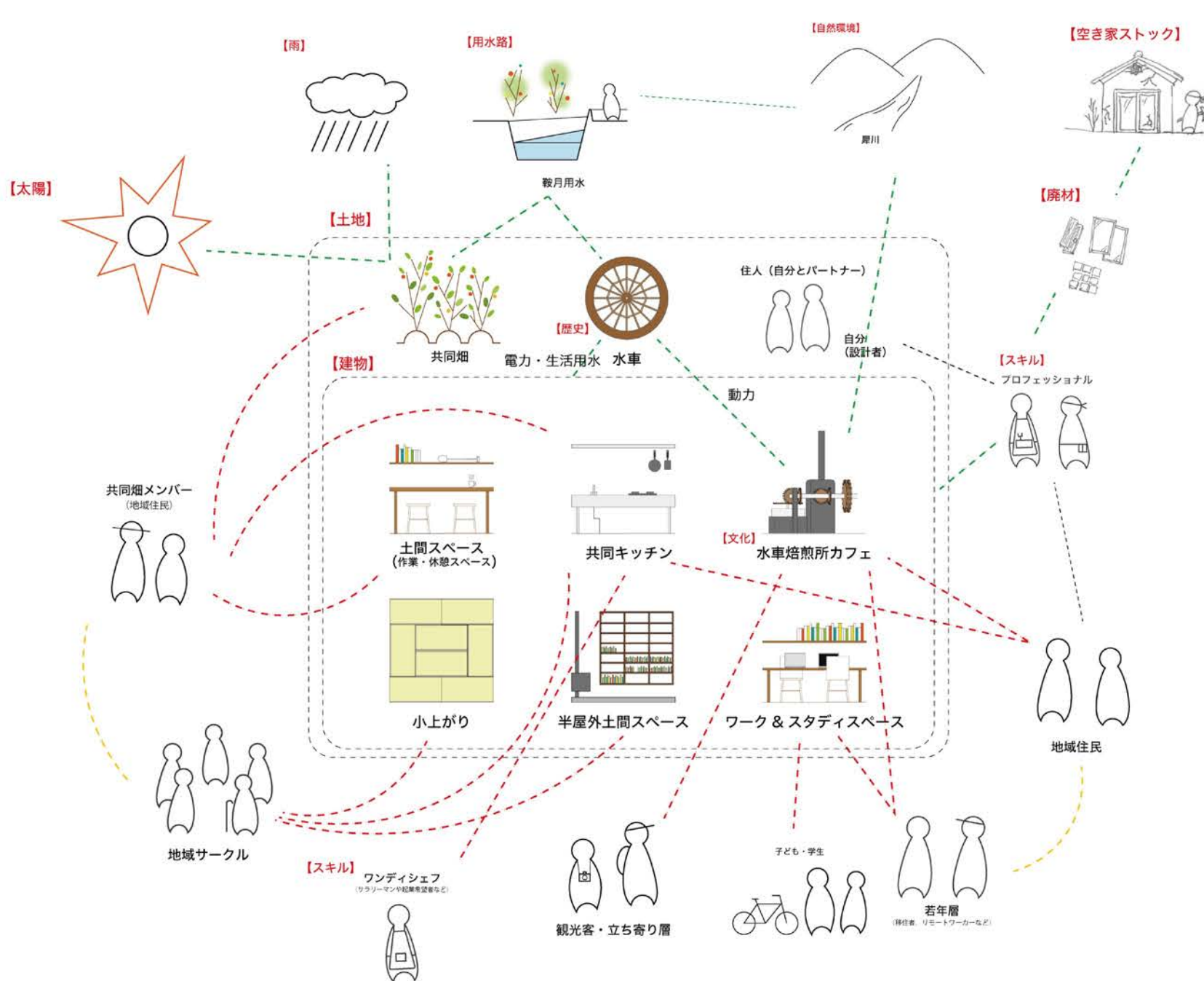


住人（自分とパートナー）



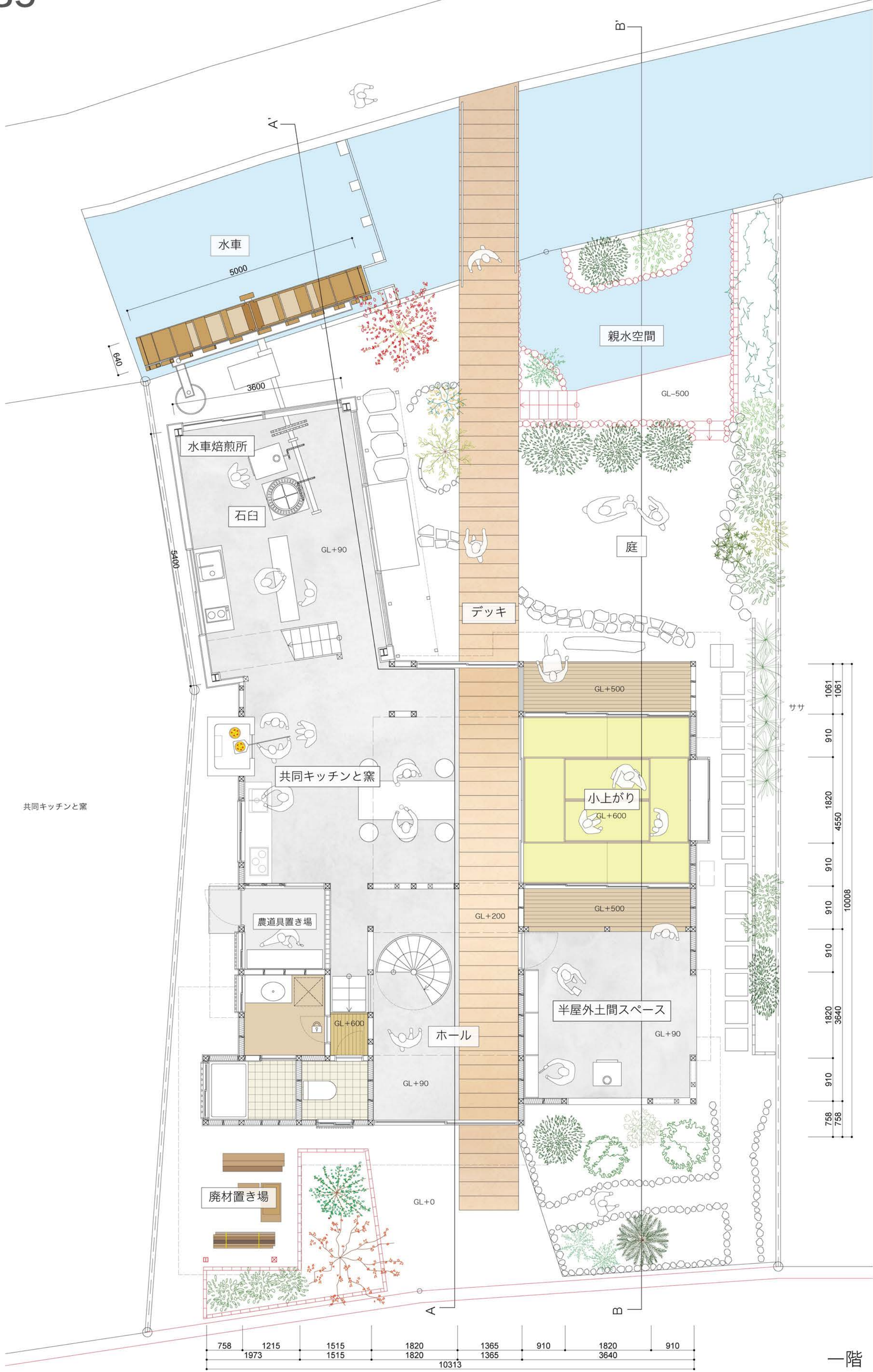
コモンズの空間

- ・共同畑
- ・土間スペース（作業場兼休憩スペース）
- ・共同キッチンと窯
- ・土間スペース
- ・小上がり
- ・水車
- ・コーヒー焙煎所
- ・石臼
- ・半屋外土間
- ・ワーク & スタディスペース



Phase5

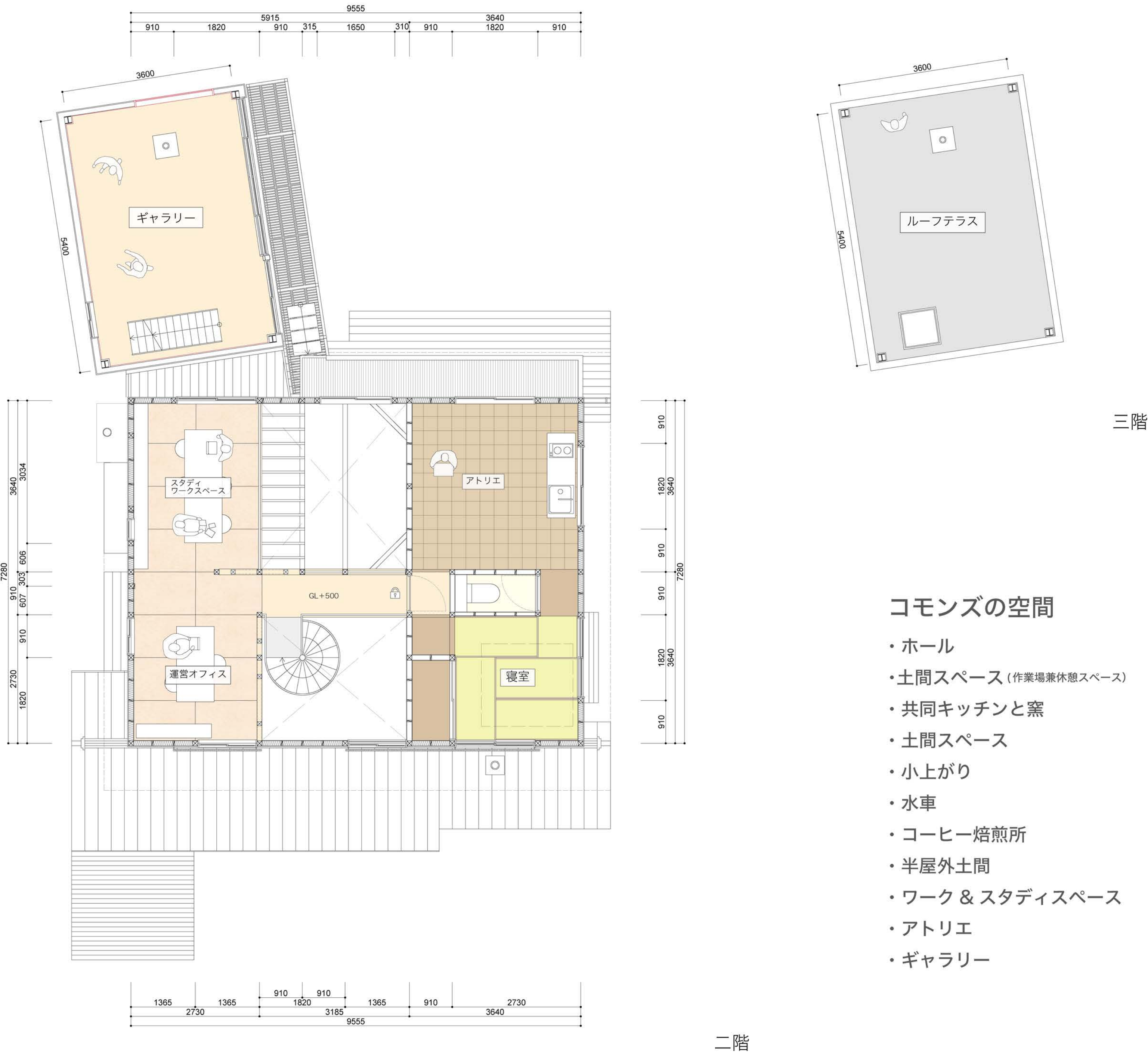
2085～



滞在型アトリエ，ギャラリーと親水空間

自分とパートナーが亡くなり、運営団体へ信託していた土地と建物は団体へと引き継がれた。かつて自分たちが暮らしていた空間は、金沢に根付くアート文化を共有する場として「滞在型アトリエ」へと改修された。このアトリエでは、アーティストが一定期間滞在し、金沢の街や文化に触れながら制作を行う。滞在中、アーティストはコモンズに集う人々と交流し、地域に根ざした作品を生み出す。そして、その成果はギャラリーやコモンズの中で展示・販売される。異なる環境に身を置くことでアーティストは新たなインスピレーションを得られ、地域住民は外部の視点を通じて自らの暮らす場所を捉え直す機会を得る。

一方、共同畑の利用希望者が増えたことを受け、地域住民との話し合いの末、畑を近隣のより広い空き地へ移転することが決まった。移転後の跡地の活用についても議論が重ねられた結果、最も多くの賛同を集めたのは「較月用水への親水空間」だった。設計にあたっては、水辺に親しめる工夫を凝らし、夏には都市部でも涼を取れる場となった。こうして、地域の貴重な水資源を身近に感じられる空間がコモンズに誕生した。



コモンズの空間

- ・ホール
- ・土間スペース（作業場兼休憩スペース）
- ・共同キッチンと窯
- ・土間スペース
- ・小上がり
- ・水車
- ・コーヒー焙煎所
- ・半屋外土間
- ・ワーク & スタディスペース
- ・アトリエ
- ・ギャラリー

Phase5



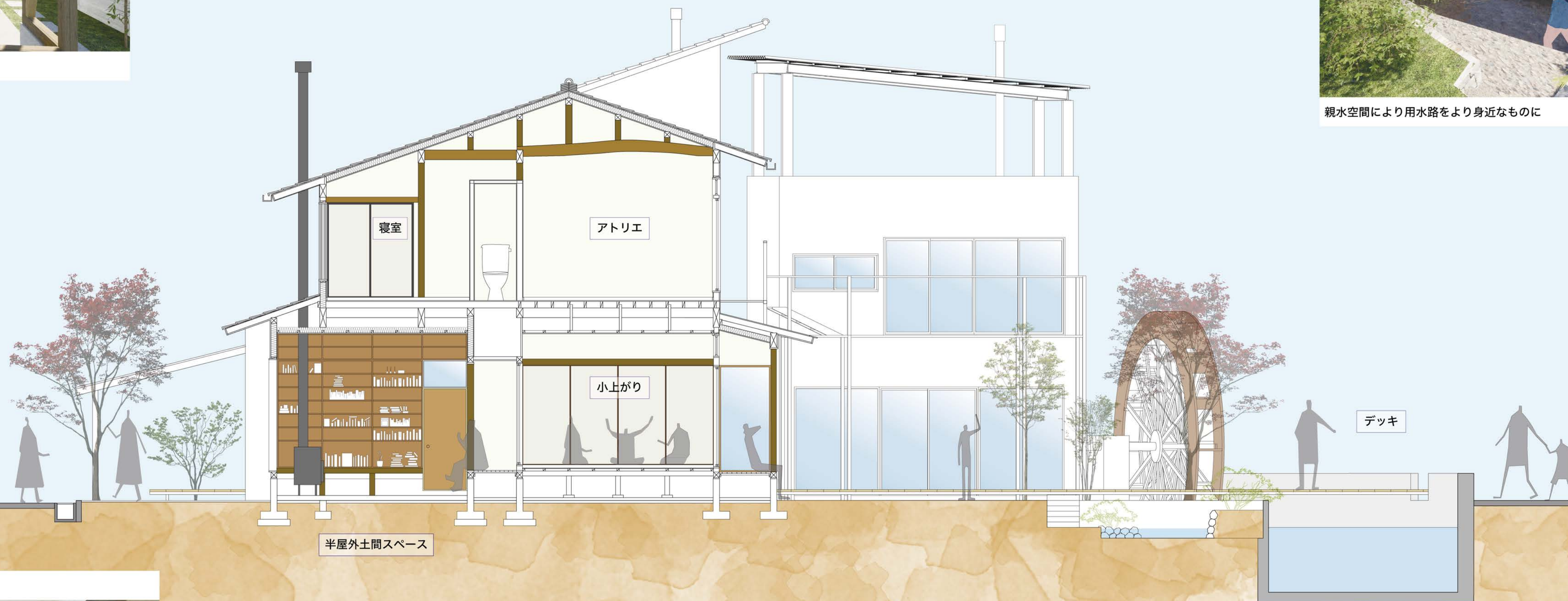
通りから内部の様子がよく見える



アーティストが滞在しながら制作を行うアトリエ



親水空間により用水路をより身近なものに



既存本棚を残した半屋外土間、小上がりと一体化して使うことも

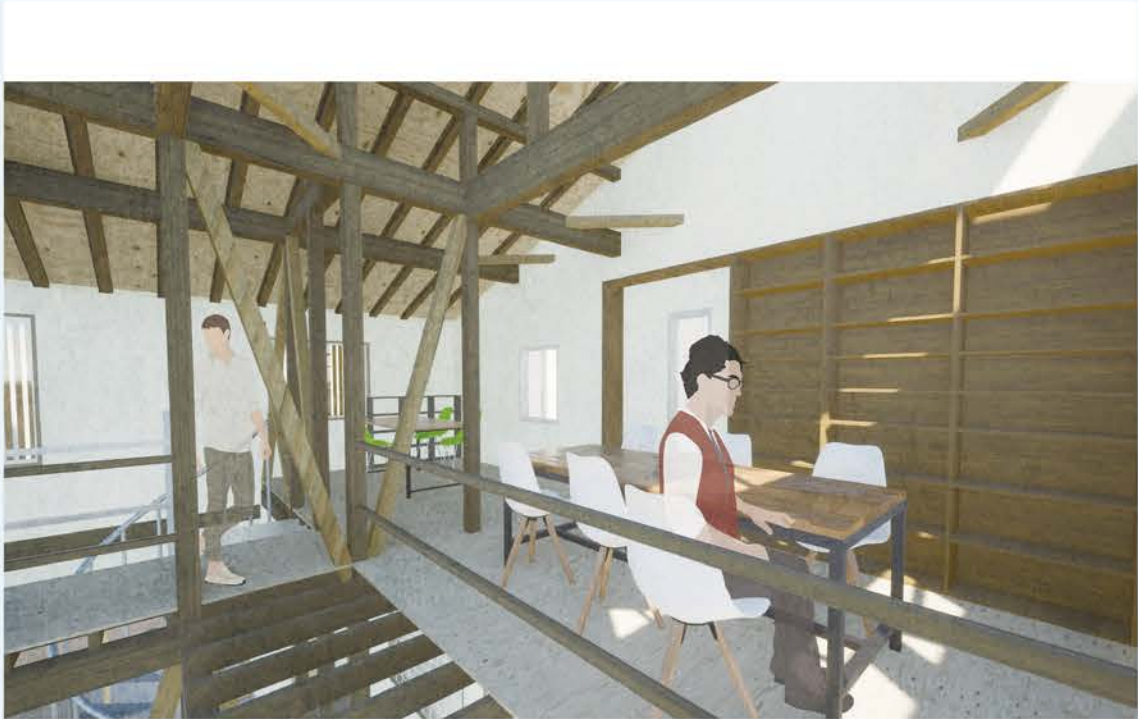


地域サークルの集会やWSに便利な小上がり



デッキは建物を貫通し、人々を commons へ誘い込む

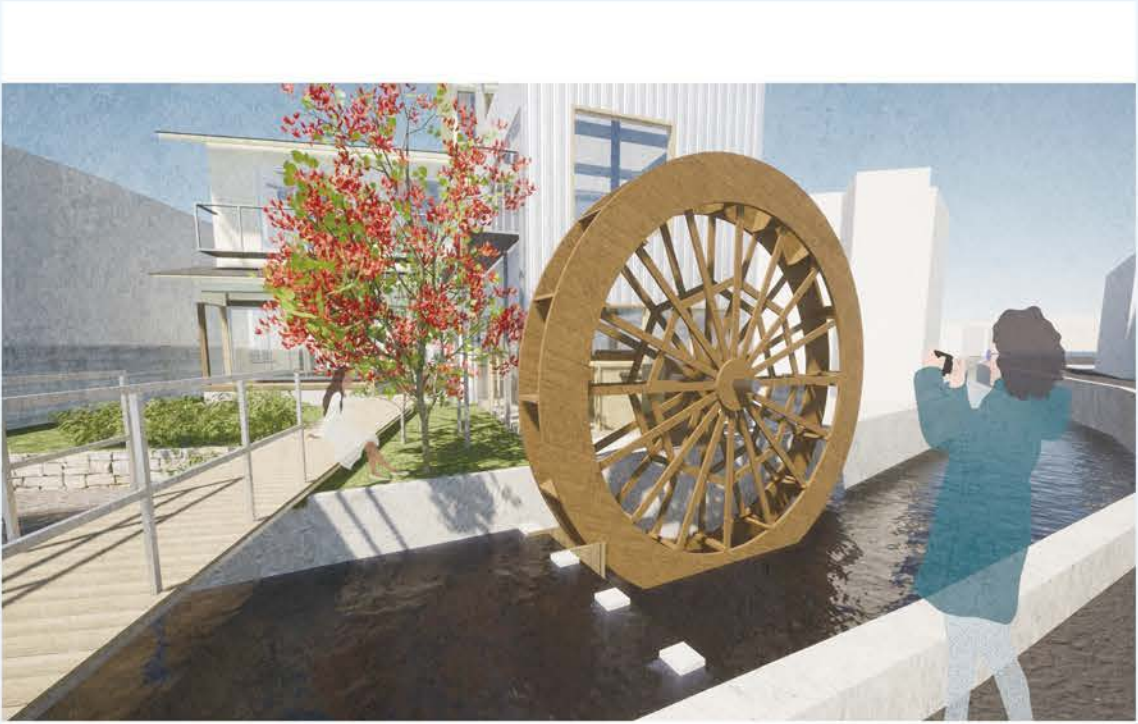
Phase5



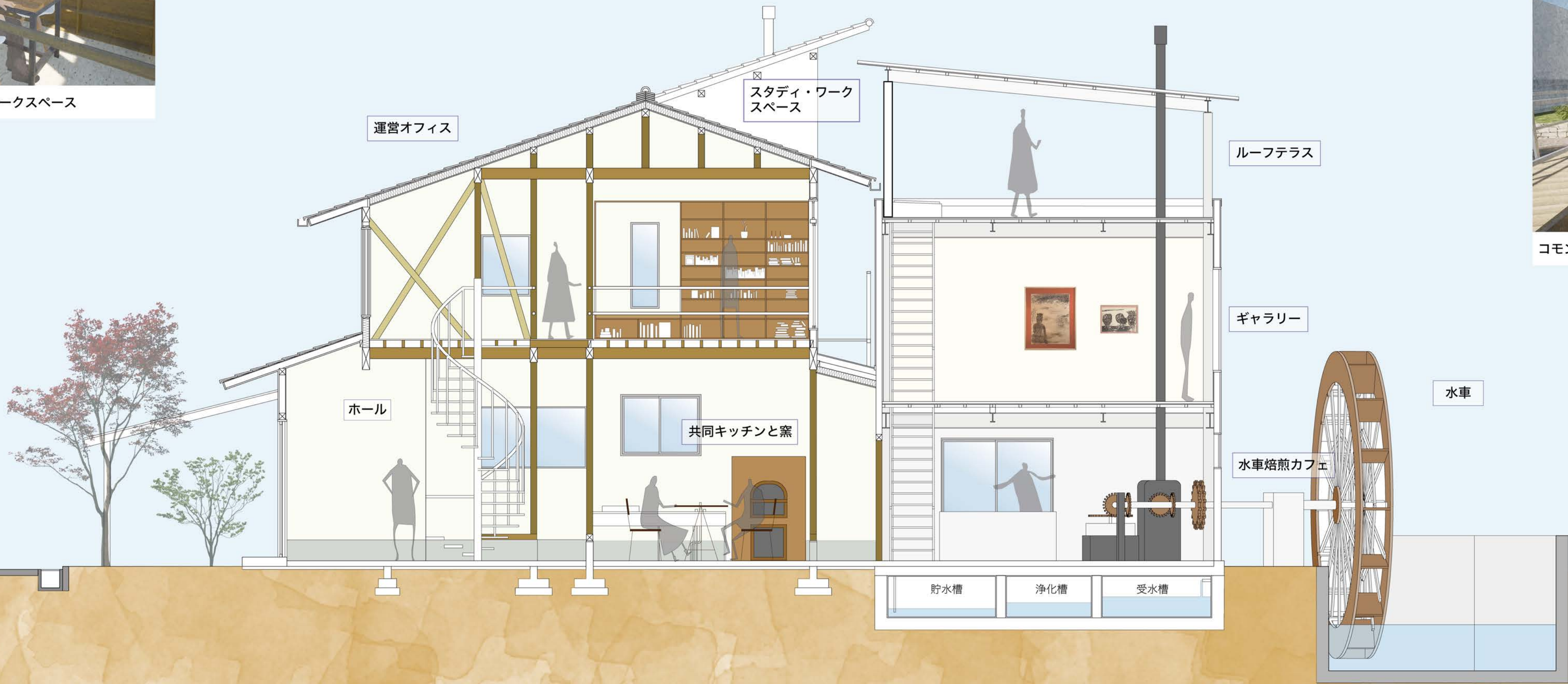
東側にハイサイドライトのある明るいスタディ・ワークスペース



ギャラリーの窓からは水車が見える



コモンの象徴的な水車



正面入り口から内部を見る。手前には植栽 WS で植樹した植物たち。



水車の動力を用いる水車焙煎所カフェ

■ 創出されたコモンズが結びつける資源と人のネットワーク

